

吉田誠夫 著

庾信——四賦注釈

哀江南賦

枯樹賦

小園賦

三月三日華林園馬射賦

はしがき

本稿は、庾信の「哀江南の賦」「枯樹の賦」「小園の賦」「三月三日華林園馬射の賦」の四編の賦について注を施し解釈を試みたものである。

まず庾信の生涯を概述しておこう。

庾信（五一三～五八二）、字は子山、南陽新野（今の河南省にある）の人。梁の詩人で散騎常侍の庾肩吾（四八七～五五一（五五二とも））の子。艶麗な詩風を特色とする宮体詩の作手としてもはやされ、その詩体は徐陵（五〇七～五八三）と併称されて〈徐庾体〉といわれる。徐陵とともに抄撰学士となり、父が東宮にあつたとき、太子蕭綱（五〇三～五五一、後の簡文帝）のならびなき恩礼を蒙り、尚書度支郎中、通直散騎常侍、東宮学士となる。侯景の乱が起き、その軍団が攻め寄せてきたとき、簡文帝の命によって防衛に当たつたが、戦線を放棄し、江陵（今の湖北省荆州市江陵区）の湘東王蕭繹（五〇八～五五四）のもとに身を寄せた。簡文帝は建康（今の南京）の宮城内で侯景によつて殺害されたが、乱の平定後、簡文帝のあとを受けて蕭繹が江陵において即位（元帝）すると、庾信は右衛將軍に転じ、武康県侯に封じられ、散騎常侍を加えられた。やがて西魏との国境画定問題に関して、元帝の命を奉じて西魏の都長安に出兵することになるが、長安に滞在中、西魏によつて梁が滅ばされたため、そのまま長安にとどまり、西魏から北周に仕えることとなつた。官は開府儀同三司に至り、一流の文化人として、そして何よりもすぐれた詩文の師として仰がれ、厚遇された。（庾信の生涯の詳細については、興膳宏の『望郷詩人庾信』（集英社、一九八三年）、魯同群の『庾信伝論』（天津人民出版社、一九九七年）を参照されたい）。

庾信の作品でその前半生の梁朝において作られたものは当時の戦乱の渦中でほとんど亡佚してしまい、現存する作品のほとんどはその後半生の北周において作られたもので、それもかなりの散佚を免れなかつたも

のであるが、その詩文は明・屠隆刊本『庾子山集』に収められている。いまその内訳を『庾子山集』によって示すと次のようである。

賦 15篇／詩 231篇／樂府 21篇／郊廟歌辭 6篇／66章／表 12篇／啓 16篇／書 1篇／連珠 44篇／讚 28篇
／教 1篇／文 3篇／序 1篇／伝 1篇／銘 10篇／碑 14篇／墓碑銘 21篇

本稿で扱った四つの賦は、以上の作品群に照らしてもわかるように全体を構成するごく一部にすぎない。しかし、「哀江南賦」では歴史の転換期にあつて時代とおのれの人生を綯い交ぜながら郷関の思いが述べられ、「枯樹賦」では異朝に仕えた者の虚ろな内面世界が象徴的にうたわれ、「小園賦」では隠逸の世界への志向が語られ、「三月三日華林園馬射賦」では北周武帝への讚歌が綴られるとともに、北周に仕えて生きようとする決意表明にも似た思念が示される、といったように庾信の全体像を考えるうえでそれぞれ重要な作品となっている。人間は矛盾の束であり多面的な存在であるといわれるが、この四賦は庾信作品から作りあげられた庾信の全体像のいくつかの側面を解き得る鍵として、庾信の代表作といつても過言ではあるまい。しかしながら、作品を生み出した者をよりよく理解しようとするには、その作品の全体に触れること、それがかなわぬ場合にはできるだけ多くの作品に触れることが求められるので、注において、注記の内容とかかわる作品を掲示した。また注記と深くかわっているわけでもないのにやや強引に作品を引用しているところもあるが、そのねらいは庾信の作品をできるだけ多く紹介しようとしたからにはほかならない。それらの作品については、その作品の全体を引用したばあいに限って「目次」に「所引作品」として示しておいた。

参考資料として『周書』の「庾信伝」および「滕王道序」^{トウダウシ}を収めた。「庾信伝」については興膳宏編『六朝詩人傳』（大修館書店、二〇〇〇年）に原田直枝氏による詳細な注と訳が付されて収められているので、ここでとりあげるのは蛇足ではあるが、庾信の略伝を知るのに便利な資料であるとともに、本書の施注においてもしばしば引用しており、その全体を容易に参看し得るためにもあえてその原文と訓読文を掲げておくこととした。「滕王道序」は、庾信の庇護者であり、また庾信を文学の師とも仰いだ宇文述^{ウブンシュ}（北周・文帝の皇子）が「庾

信集」に寄せた「序」で「集序」ともいわれ、庾信の作品を除けば、庾信にかんする第一次資料である。この「滕王道序」については加藤国安氏による解釈がある（加藤国安「越境する庾信―その軌跡と詩的表現―」研文出版社、二〇〇四年所収）が、氏の解釈とすこしく違いもあるので、「滕王道序箋注」と題していささか卑見を示しておいた。

注釈を施すに当たっては、注記のなかに掲げておいたように多くの文献に依拠したが、もつとも頼りにしたのは清の倪璠^{ゲイハン}の『庾子山集注』である。

倪璠は、字は魯玉、錢塘の人、康熙四十四年（二七〇五）の挙人、官は内閣中書舎人、という以外には若干の著作をのぞいてほとんど知られていないが、この『庾子山集注』の一書によってすぐれた庾信研究者としてその名を今に伝えている。庾信の作品を読むにさいしては必ず本書が繙かれる。学生時代、はじめて庾信の作品に接したのも本書を通じてであった。この書なくしてはほとんど読みえなかつたといつても過言ではない。また譚正璧・紀馥華選註『庾信詩賦選』（古典文学出版社、一九五八年・上海）にもまた裨益されること大いにあつたことを付言しておく。

庾信の作品の多くは、ほかの六朝の詩人のそれにもまして典故というヴェールに覆われているが、倪璠はその典故をほぼ餘すところなく明らかにし、また「哀江南賦」のような同時代史的な要素をもつた作品についてはその背景に横たわる歴史的事象を詳細に、あるいは詳細に過ぎるほど指摘している。もちろん今となつては倪璠の指摘しえなかつた事柄や錯誤などもあることが研究者によって取り上げられたりしているけれども、だからといって庾信の作品理解の基本的な参考書としての価値をいささかも減ずるものではないであらう。

わたしのこの注釈は、いささかの新見を提出したとはいつても、それは寥寥たるものであり、ほとんど倪璠の注をなぞつたに過ぎないともいえる。注記のなかに倪璠の名がしばしば出てくるのはその証しであるが、倪璠の名が出てきていない場合でも、倪璠の注にもとづいているところや、その注に示唆されて解釈し

たところが多々ある。したがって屋下に屋を架したといった印象をまぬがれない。かろうじて本書が意味をもつとすれば、語句の出典の所在をいつそう明らかにし、庾信の主要な作品〔哀江南賦〕〔枯樹賦〕〔小園賦〕〔三月三日華林園馬射賦〕および注記のなかで取り上げた作品群を、どうにか日本語で読めるようにしたことである。

ところで、本来、注とは、注の対象となる事柄の意味などを、夾雑物を可能なかぎり取り除いて明確に示すべきものであろう。注の〈対象〉とするとところと関連している事柄であるとしても、〈対象〉の意味が明確になった時点で筆をとどめる。すぐれた注、さらにいえば〈あるべき注〉とはそういうものである、とわたしは考える。しかるに本書の注はどうであろう。「因みに」とか「餘談ながら」とかいったりして、注の〈対象〉の直接的理解にかかわらない事柄やら個人的な感懐やら経験やらを記し、〈あるべき注〉から離れることおびただしい個所があったりする。また注というよりもむしろ〈筆記〉に類したところもある。しかしそれらも作品理解とはあながち無縁ではないということ、すこしばかり踏み外してしまっただけである。さらにもう一つ。具体的な例をあげていえば、「哀江南賦」の「第20段」注「30」「非愚叟之可移山」の注には「愚公山を移すという故事にもとづく」と記述するだけで事足りるのであるが、その話しの出典を「列子」湯問篇に拠って原文を長々と引用していることなど。つまり短く縮約して示したほうが分かりやすいところもあるにもかかわらず、あえて原文をそのまま引いているのである。博雅には無くもがなのこうした例は随処に見られよう。それについては初学者のためを思つての老婆心のなせるわざとして諒とされた。

なお注記の中にしばしば『蒙求』が提示されていることを奇異に感ぜられるむきもあるうと思われるが、それは庾信の取り上げた故事が『左氏伝』をはじめ決して特殊なことがらではなく、衆知の話柄であることを示したからにはかならない。

凡例

1. 底本には清の倪璠撰『庾子山集注』（四部備要本及び許逸民校点の中華書局本）を用いた。
2. 本文校異については、次の諸本を参照した。
『庾子山集』（四部叢刊初編子部所収明屠隆刊本）
『漢魏六朝百三名家集』所収「庾開府集」
『庾子山集注』（掃葉山房本）
『先秦漢魏晉南北朝詩』（遼欽立輯校、中華書局、一九八三）
『藝文類聚』（上海古籍出版社、一九六五）
『初学記』（中華書局、一九六二）
『文苑英華』（中華書局、一九六六）
以上の諸本は取り上げた4編の賦に共通のテキストであるが、「哀江南賦」に関しては、
『周書』庾信伝所収「哀江南賦」
を、「枯樹賦」に関してはさらに次の二つの資料を参看した。
褚遂良筆「枯樹賦」（聽雨樓帖本 戲鴻堂帖本。簡称して「帖本」）
とすべきであろうが、いずれもとは石刻であるので、文中では「文苑英華」にならって「碑本」と簡称した。）
『古文苑』（四部叢刊初編集部）所収「枯木賦」
3. 目次の〈所引作品〉は、注において庾信作品（詩）の全体を掲出したもので、部分引用は含まない。

4. 引用した漢詩文にはすべて訓読文を付した。まれに注釈を施した。
5. 漢詩文の原文の引用は旧字体に拠り、訓読文は新字体、旧仮名遣いに従った。文中における詩題などの作品名は新字体に拠ったが、訓読文を伴うものについては旧字体に拠った。
6. 引用した詩・句・文、および〈所引作品〉については施注をできるだけ省略した。
7. 訓読文中の「」内の語・語句は文意を分かりやすくするための補入、（）内の語・語句・文は補注である。なお、（）内の括弧は「」で示した。
8. 人名には生歿年を初出に限らず、適宜示した。生歿年は、『歴代人物年里通譜』（世界書局、中華民國八十二年（一九九三））『中国歴史大辞典』中国歴史大辞典編纂委員会（上海辞書出版社、一九九〇年）
9. 卷末に「梁朝王室（蕭氏）系図」を付した。主として『梁書』『陳書』『周書』『南史』『魏書』『北史』『南朝梁会要』および『資治通鑑』などに拠って作成した。
10. 注記中の氏名についてはすべて敬称を省略した。

目次

はしがき

凡例

『周書』庾信伝

滕王道序箋注

哀江南賦注釈

枯樹賦注釈

小園賦注釈

三月三日華林園馬射賦注釈

629 541 463 45 12 10 7 3

所引作品

擬連珠 第9首
燕歌行
擬詠懷 第21首
擬詠懷 第10首
擬詠懷 第26首

57 65 75 81 82

擬連珠 第24首
思舊銘
寄徐陵
擬連珠 第37首
鶴讚

82 84 97 98 103

擬連珠 第19首
擬連珠 第3首
寄王琳
擬詠懷 第7首
擬連珠 第10首

194 200 249 278 284

擬連珠 第44首
擬連珠 第12首
擬詠懷 第23首
擬連珠 第13首
擬連珠 第39首
擬詠懷 第11首
擬詠懷 第12首
擬詠懷 第27首
擬連珠 第14首
擬連珠 第17首
擬連珠 第28首
李陵蘇武別讚
和侃法師三絶
和庾四
別周尙書弘正
別張洗馬樞

308 360 361 374 382 393 394 395 410 425 427 429 430 430 431 432

送周尙書弘正二首
重別周尙書
閨怨
賦得集池雁
傷往
擬詠懷 第4首
擬連珠 第16首
奉和永豐殿下言志 第4首
正旦上司憲府
奉和趙王西京路春旦
奉和永豐殿下言志 第8首
夜聽搗衣
慨然成詠
擬連珠 第27首
擬連珠 第31首
周祀五帝歌・青帝雲門舞

432 433 433 434 434 435 443 455 456 459 461 469 493 493 493 494 495

山中
春賦
對酒歌
和趙王看妓
代人傷往
擬連珠 第32首
擬連珠 第42首
山齋
擬詠懷 第16首
幽居值春
臥疾窮愁
和裴儀同秋日
周祀圓丘歌・昭夏
春望

511 524 532 535 537 573 573 574 579 587 595 610 662 717

梁朝王室(蕭氏)系図
参考文献
あとがき

727 732 751



哀江南賦注積

(便宜上全体を25段に分ち、各段に番号を付した)

- 第1段 粵以戊辰之年 (47)
- 第2段 日暮途遠 (76)
- 第3段 孫策以天下爲三分 (104)
- 第4段 我之掌庚承周 (124)
- 第5段 水木交運 (135)
- 第6段 王子賓洛之歲 (157)
- 第7段 於時朝野歡娛 (170)
- 第8段 豈知山嶽闐然 (183)
- 第9段 彼姦逆之熾盛 (211)
- 第10段 始則王子召戎 (226)
- 第11段 將軍死綏 (250)
- 第12段 申子奮發 (267)
- 第13段 於是桂林顛覆 (282)
- 第14段 爾乃假刻璽於關塞 (293)
- 第15段 若乃陰陵失路 (305)

- 第16段 嗟天保之未定 (316)
- 第17段 於是西楚霸王 (330)
- 第18段 直虹貫壘 (343)
- 第19段 若夫立德立言 (350)
- 第20段 中宗之夷凶靖亂 (368)
- 第21段 況以沴氣朝浮 (383)
- 第22段 下江餘城 (395)
- 第23段 水毒秦涇 (411)
- 第24段 若江陵之中否 (436)
- 第25段 且夫天道迴旋 (446)

哀江南賦「1」

哀江南の賦

〔第1段〕

- 粵以戊辰之年
- 建亥之月〔2〕
- 大盜移國
- 金陵瓦解〔3〕
- 余乃竄身荒谷
- 公私塗炭〔4〕
- 華陽奔命
- 有去無歸〔5〕
- 中興道銷
- 窮於甲戌〔6〕
- 三日哭於都亭〔7〕
- 三年囚於別館〔8〕
- 天道周星
- 物極不反〔9〕
- 傳變之但悲身世
- 無處求生〔10〕

- 粵 戊辰の年、
- 建亥の月を以て、
- 大盜 國を移し、
- 金陵 瓦解す。
- 余は乃ち身を荒谷に竄れしも、
- 公私 塗炭せり。
- 華陽より奔命し、
- 去ること有りて帰ること無し。
- 中興に道は銷え、
- 甲戌に窮まれり。
- 三日 都亭に哭き、
- 三年 別館に囚へらる。
- 天道 周星のとき、
- 物極まれども反らず。
- 傳變のごとく但だ身世を悲しみ、
- 処として生を求むる無く、

袁安之每念王室
自然流涕〔11〕
昔桓君山之志事〔12〕
杜元凱之平生〔13〕
竝有著書
咸能自序
潘岳之文采
始述家風〔14〕
陸機之辭賦
先陳世德〔15〕
信年始二毛
即逢喪亂
貌是流離
至於暮齒〔16〕
燕歌遠別
悲不自勝〔17〕
楚老相逢
泣將何及〔18〕
畏南山之雨〔19〕

袁安のごとく毎に王室を念ひて、
自然に流涕す。
昔、桓君山の志事、
杜元凱の平生、
並びに著書有りて、
咸な能く自ら序ぶ。
潘岳の文采、
始めて家風を述べ、
陸機の辭賦、
先づ世徳を陳ぶ。
信、年始めて二毛、
即ち喪亂に逢ひ、
貌として流離し、
暮齒に至る。
燕歌もて遠く別れ、
悲しみて自ら勝へず。
楚老相逢ひて、
泣くも將た何ぞ及ばん。
南山の雨を畏れしが、

忽踐秦庭〔20〕
讓東海之濱〔21〕
遂餐周粟〔22〕
下亭漂泊〔23〕
高橋羈旅〔24〕
楚歌非取樂之方〔25〕
魯酒無忘憂之用〔26〕
追爲此賦
聊以記言
不無危苦之辭
惟以悲哀爲主〔27〕

忽ち秦庭を踐み、
東海の浜に譲りしより、
遂に周の粟を餐へり。
下亭に漂泊し、
高橋に羈旅す。
楚歌は樂しみを取るの方に非ず、
魯酒は憂へを忘るるの用無し。
追ふて此の賦を爲り、
聊か以て言を記す。
危苦の辭無きにあらず、
惟だ悲哀を以て主と爲すのみ。

〔通 釈〕
ああ、梁武帝の太清二年十月のこと、
大盜ともいふべき侯景によって国は奪われ、国都金陵は
瓦解してしまつた。
わたしは難を江陵に逃れたが、侯景が乱を起こしてから
というものの官民ともども塗炭の苦しみを嘗めることとなつ
た。

わたしは江陵より命を奉じて西魏に出使したが、そのま
ま魏都長安に留められて帰れなくなつた。
ところで、侯景の乱が平らげられて中興の業がなつたか
に思われたが、こんどは江陵が西魏に奪われて、わが元帝
が害せられ甲戌(承聖三年)に中興の道はついでたのであつ
た。
かくてわたしは、かの羅憲が、蜀の敗れたとき都城の亭

子で3日間も哭きつづけたように、梁の滅亡を悼みつつも、身は西魏に抑留されたのである。

天道が惑星をひとめぐりする「周星」のとき、物は窮極にまで至ればきつともにもどる、といわれているが、梁の命運は窮したまま、ついにともにもどることはなかった。漢陽の太守傅燮は漢陽が囲まれたとき、信義をつくすことに殉じて、生き延びることなどを求めず、

袁安は外戚が権力をほしのままにして王室をないがしろにするのを憂慮するあまり、涙を流して嘆いたといわれる。桓譚・杜預のように志のある者はいずれもその平生より志向するところを述べてをり、

潘岳は美麗なことばで家風を、陸機は辞賦でまず世徳を述べている。(わたしもまたおのれの志趣と家風を述べるであらう。)

わたしは頭髮に白いものがようやくまじるころ、侯景の乱に遭い、

また故園をはるかにも離れてさすらい、この北地において晩年を迎えることとなった。

遠い別れをうたう燕歌を聞いては、悲しみを抑えることができずにいるが、

楚国の父老に逢って泣いてみたところで、異朝に仕えた

身をいまさら何としよう。

そのはじめは、侯景の乱を恐れて江陵に逃れ隠れたのであったが、楚の申包胥が楚国を呉の侵犯より救おうとして秦王にまみえたように、

わたしもまた慌ただしくも秦の故都、すなわち西魏の長安に赴くこととなった。

しかしながら、戦国のとき、田和が斉の康公を海浜に遷してみずから斉の威王となったように、宇文覚が西魏の禪讓を承けて周を建てるにおよび、

わたしは、かの伯夷・叔斉に似ず、ついに(周の粟)を食らうはめになってしまったのである。

公府に召されて京師に赴く道すがら下亭で馬を盗まれてしまった孔嵩、深い学識をもちながら人に備われて白を舂いた梁鴻。(わたしも彼らのように、流浪の空のもとでさまざまな困難に出会った。)

国を喪ったこの身には、楚の歌は悲しみをいや増すばかり、魯の国の水っぽい酒では憂いも晴れない。

よって、来し方を顧みてこの賦をつくり、いささかことばを記すとしよう。

この身に受けた危険と苦痛とをあらわしたことはもまあるにはあるが、ただ悲哀をもって主となすのみである。

【1】哀江南賦 倪璠はこの賦題について次のようにいう。

哀江南賦者、哀梁亡也。本傳、信雖位望通顯、常作鄉關之思、乃作哀江南賦以致其意。宋玉招魂曰、魂兮歸來、哀江南。宋玉戰國時楚人。梁武帝建鄴、元帝都江陵、二都本戰國楚地、故云。

哀江南の賦は、梁の亡びしを哀しむなり。本伝(周書「庾信伝」に、「庾」信は、位望通顯(官位が高く声望が世に顕われていること)すと雖も、常に郷関の思ひを作す、乃ち哀江南の賦を作りて、以て其の意を致す、と。宋玉(前二九〇〜前二二二)の招魂に曰く、魂よ帰り来たれ、江南に哀しむ、と。宋玉は戦国の時の楚の人。

梁の武帝(四六四〜五四九。在位五〇二〜五四九)、建鄴を都とし、元帝(五〇八〜五五四。在位五二二〜五五四)、江陵を都とす。二都は本戦国の楚の地、故に「哀江南の賦」と云ふ。

*なお宋玉の居宅については「第4段」・注【12】「誅茅宋玉之宅 穿徑臨江之府」を参照せよ。

賦題の由来についてはこの倪璠の簡略な説明に尽きているといえよう。ただし宋玉の「招魂」は、後漢の王逸(生歿年未詳。安帝の時に校書郎、順帝の時に侍中となる)の注(楚辞章句)によれば、

宋玉憐哀屈原忠而斥棄、愁澹山澤、魂魄放佚、厥命將落。故作招魂、欲以復其精神、延其年壽、外陳四方之惡、內崇楚國之美、以諷諫懷王、冀其覺悟而還之也。

宋玉、屈原(前三三九〜前二七八?)の忠にして斥け棄てられ、山野に愁澹(悲しみ悶えること)し、魂魄放佚(はうい)して、厥の命の將に落ちんとするを憐哀す。故に招魂を作りて、以て其の精神を復し、其の年壽を延べんと欲し、外は四方の惡を陳べ、内は楚國の美を崇びて、以て懷王(前二九九)を諷諫(それとなくいさめること)し、其の覺悟して(目覚め悟つて)之を還さんことを冀ふなり。

というもので、「魂兮歸來、哀江南」の句については、「言魂魄當急來歸、江南土地僻遠、山林嶮阻、誠可哀傷、不足處也。(魂魄當に急ぎ来たり歸るべし、江南は、土地は僻遠、山林は嶮阻にして、誠に哀しみ傷む可く、処るに足らざるを言ふなり)」という。つまり「魂兮歸來、哀江南」という句は、楚の懷王からしりぞけ棄てられ、江南の地に哀しい思いを抱いて流離している屈原の魂を招き寄せせるための呼びかけである。しかし庾信はこの「哀江南」を、江南への哀悼の思いに転化して用いた。その意味でウィリアム・グラハムが「哀江南」を「Lament for the South」と訳した

著者略歴

吉田 誠夫 (よしだ・のぶお)

1941年東京生まれ。二松学舎大学大学院文学研究科中国学専攻博士課程修了。みすず書房編集部、昴教育研究所、芝浦工業大学高等学校を経て、東日本国際大学講師、同大学儒学文化研究所副所長、2010年退職。2021年没。

編著書に『中国文学研究文献要覧 1945-1977 (戦後編)』(〔共編〕日外アソシエーツ、1979年)、『漢字辞典』(〔共編〕講談社、1998年)、『姜夔詞選』(芝浦工業大学・教員研究報告、平成8年度版)、『漢字のおさらい』(自由国民社、2012年)、『中国職官辞典 秦から南宋まで』(日外アソシエーツ、2020年)など。

庾信一四賦注釈

哀江南賦・枯樹賦・小園賦・

三月三日華林園馬射賦

2022年5月25日 第1刷発行

著者 吉田誠夫
発行 者 山下浩
発行 行 日外アソシエーツ株式会社

〒140-0013 東京都品川区南大井6-16-16 鈴中ビル大森アネックス

電話 (03)3763-5241 (代表) FAX(03)3764-0845

URL <https://www.nichigai.co.jp/>

組版処理 有限会社デジタル工房

印刷・製本 シナノ印刷株式会社

©Nobuo YOSHIDA 2022

不許複製・禁無断転載

<落丁・乱丁本はお取り替えます> (中性紙北越淡クリームキンマリ使用)

ISBN978-4-8169-2923-6

Printed in Japan, 2022